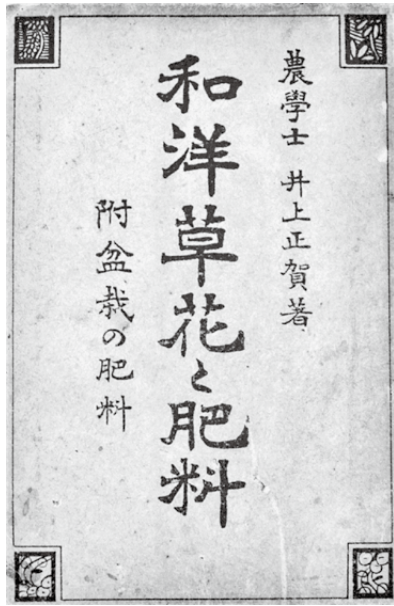


【収蔵品紹介】
井上正賀著『和洋草花と肥料 附盆栽の肥料』（大学館発行 明治44年）

本書は、植物の生育や生理について述べた後、草花各種の肥料について記述し、最後に「第十一話 盆栽の生理と肥料」の項目を置いています。この第十一話では、水分や温度、光線（日照）、養分などが植物に与える作用など、一般論を述べるにとどめていきます。

著者は農学士で、「余は不肖ながら肥料専門の学を修めたもの」と、序にあります。また、同著『飲食養新談』（昭和4年、酒罐誌新報社、国立国会図書館）

井上正賀著『和洋草花と肥料 附盆栽の肥料』（大学館発行 明治44年）



シタルコレクション参照）では、明治28（1895）年に東京農科大学農芸化学科（現東京大学農学部）を卒業したと書かれています。その他、多岐にわたる化学分野の著書があり、本書は化学分野を修めた学術的な立場の人が書いた書籍といふことがわかります。

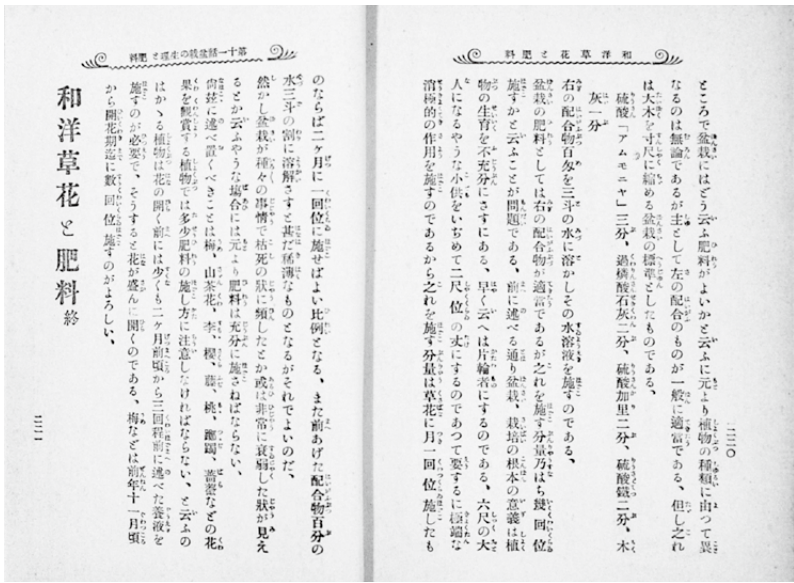
盆栽については、第十一話で、「多く経験があると云ふわけではない」と述べており、著者は盆栽愛好家ではなかったようです。本書以前に刊行された盆栽関連書籍は、殆どが盆栽家や盆栽愛好家によって執筆されています。例外として、東京府農事試験場長を務める農学士の作間餘三郎が『家庭園芸 花卉と盆栽』（明治38年、本誌の2022年6月号で紹介）を刊行し、当時の潮流であった「家庭園芸」の中で盆栽を語り、培養法について科学的に記述しようという試みが見られますが、培養法については従来の盆栽関連書籍と殆ど同じ内容となっています。一方、井上正賀は自身の知識と経験・実験を基に記述したといひ、実際に肥料の

化学成分に言及するなど、作間餘三郎の書籍と比べて、学術的な内容となっています。このことは序からも窺え、「草花栽培家の多くは元他業から転じて栽培家となったか或は単に慰安の為に作らるゝ人々であるから一向に培養上の智識に乏しい（中略）それでは折角熱心に作らるゝ草花も改良して行くことが出来ない、実に遺憾の事である（中略）草花改良の根本を為すこの肥料の事につきて聊か研究の結果を述べて同好者の参考に供しやうと思」ったといひ、他業から転じた栽培家や慰安の為に人々による培養を憂えています。この引用箇所は「草花改良」についての記述ではありますが、盆栽家や盆栽愛好家によって盆栽関連書籍が刊行されていた時期と重なるため、盆栽も意識されていたのかもしれない。盆栽の培養にかかわっていない人物によって、科学的に盆栽が語られている本書は、盆栽の普及と担い手の変化を考える好材料と思われまふ。

著者の盆栽観については、本書の第

十一話で「茲で盆栽と云ふのは主として大木を寸尺の大きさに縮めた鉢植のこと」と述べ、大木のミニチュア版であると言っていますが、鉢植との区別はしていません。また、「盆栽はその自然の生育を遂げるのを妨げて人間の思ひのまゝの形を小さくしたり或は植物に由つては大きくしたり或は茎幹のみを大きくして枝

第十一話盆栽の生理と肥料



葉を小さくしたり、小木に多数の果実を結ばしたりするのが目的である」というように、培養上の技術面での説明に終始しています。前出の作間餘三郎をはじめ、明治40年（1907）頃の書籍では、鉢植えと盆栽の区別を述べ、盆栽は自然を表現した物というようことが述べられており、井上正賀の記述と異なります。

このような盆栽観の違いは、著者個人の考え方の違いによるものなのか、それとも盆栽愛好家とそうでない人物という違いによるものかは、現時点では判断できません。しかし、当時の盆栽観がどのように浸透していたのか考えさせる点で、本書は示唆に富むものと言えます。

ちなみに、序では、「特に本書には草花栽培家の従来會て試みたことのない燻炭肥料の事を委しく載せて置いた、こ（原文ママ）は主として余の研究したもので恐らく草花改良上に数段の進歩を来すであらうとの余の確信と実験とを書いたものである」と述べ、著者が特に注力して研究している「燻炭肥料」が登場します。本書の盆栽の項目では、「燻炭肥料」について言及はありませんが、井上正賀が本書の翌年に上梓した『燻炭肥料講話』（明治45年、城北出版社、国立

国会図書館デジタルコレクション参照）では、燻炭肥料の長所として、花の「色沢」が一層美麗になり、花の直径が大きくなる効果を挙げ、「特に盆栽に至つては室内に置くものであるのに、多少にては悪臭が伴つては、どうも面白くないではないか（中略）従来の盆栽家や草花培養家は、やはり臭気のある肥料を使つている、臭気のない然かも植物に大効ある此炭燻（原文ママ）肥料は、先づ草花や盆栽の肥料として、完全なものではあるまいか」と、「第十一章 燻炭草花栽培法（并に盆栽と燻炭肥料）」の項目で盆栽における効能を主張しています。従来の盆栽関連書籍は、盆栽の培養について総合的に書かれています。本書で取り上げられた肥料のように、園芸書におけるあるテーマの説明文に盆栽が含まれるというスタイルは、今までにない新しいものです。

明治40年頃から、盆栽が学術的な立場の人物によって科学的に研究されるようになり、その背景に何があったのか、盆栽観や盆栽の普及にどのような変化をもたらしたのか、今後の課題を示してくれる資料です。

（当館主事 立石見雪）